

スマホの活用、「自動車」市場へ拡大

◆鍵はスマホのデジタルキーに。カーシェアリングが拡大

ゼネラルモーターズ（GM）は、2016年1月、新たにカーシェアリングに特化したサービス「MAVEN」を立ち上げた。スマートフォン（スマホ）のアプリから車両タイプを選び、乗車時間と返却時間を入力すると、近隣の利用可能な車両が表示され予約ができる。車の解錠と施錠もスマホ画面で操作する。返却はMaven Stationに駐車して終了となる。保険やガソリン代が込みで1時間あたり6ドル。MAVENの開発には、GoogleやカーシェアリングZipcarの人材や知財を活用した。

ボルボ・カーもまた、2月、17年発売の対象車から鍵をなくし、デジタルキーを導入すると発表した。スマホの専用アプリ画面から、近距離無線通信Bluetoothにより、車の施錠・解錠やトランクの開け閉め、エンジン始動などを行う。16年春からスウェーデンで、カーシェアリングの実証実験を開始する。スマホで空車状況を確認して予約を行う。17年にもサービスを開始する計画である。

米ウーバーをはじめ、DeNAなど国内でも参入が相次ぎ、カーシェアリングビジネスが拡大してきている。スマホを使った車の貸し借りは今後、個人間でも広がるものと予想され、所有形態やシェアの在り方が多様化してきそうだ。

◆スマホの技術やアプリを活用して「自動車」市場に拡大

車の電子化が進むなか、フロントガラスに速度表示やカーナビガイドが液晶パネルのように表示されるヘッドアップディスプレイ（HUD）の開発が進んでいる。

16年3月発売予定の車載スタンド「HUDWAY Glass」は49ドルという安さと汎用性の高さで注目を集めている。ダッシュボードにHUDWAY Glassを設置してスマホを置くと、スマホ画面が透過型の反射板に映しだされHUD型のカーナビになる。

スマホやタブレットをドライバーの視界に置く車載ホルダーも市販されているが、ドライバーが視線を移動させることなく運転ができるかがポイントとなる。

スマホの技術を車載向けに展開する動きがトレンドとなっている一方、スマホのアプリを活用した商品開発も進められている。安全で快適なクルマ社会の実現に向けて、魅力ある自動車産業への相次ぐ参入は続きそうだ。 【米山久美子】